

神奈川県考古学会

# 考古かながわ 第49号

## ちがさき丸ごとふるさと発見博物館と文化財

茅ヶ崎市教育委員会 富永富士雄

茅ヶ崎市では平成15年度から「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」事業（以下、丸ごと博物館）を進めています。

ちがさき丸ごと博物館は、従来の建物としての博物館とは異なり、市域すべてが屋根も囲いもない博物館という考え方に基づいています。この中（市域）にあるあらゆる物、事象、歴史、文化などを都市資源として捉え、これらが丸ごと博物館の展示資料ということになります。

私たちはこの事業の立ち上げに際し、エコミュージアムという概念を学び、住民が自分たちの地域の未来のために、自分たちの考えと力で運営していく、いわば博物館を運営する者も利用する者も、すべて住民であるという考えを基本理念とすることにしました。

事業は、有識者及び公募市民からなる事業検討委員会により、市民の思う「市の宝物」（都市資源）を抽出し（収集）、これらを考古・歴史、民俗、自然・環境、観光・産業の4分野に分類し（調査・研究）、必要な保護・保存及び活用の検討のための基礎資料としました。一方、これらの都市資源を調査・研究・活用する担い手（学芸員的役割）を確保するため、茅ヶ崎市の4分野を網羅した2年6ヶ月に及ぶ「ガイド養成講座」を行い、丸ごと博物館の体制作りを進めました。現在は、市民スタッフを主

体とした都市資源を巡るツアーガイドやイベント、季刊誌や文化財マップなどの刊行が続けられています。この事業推進の方法論は、従来の博物館活動と同様なものですがこの事業の目的は「生涯学習でまちづくり」、「文化が身近にあるまちづくり」、「仲間が増やせるまちづくり」であり、まちの活性化に主題が置かれています。

私たち文化財や博物館を担当する者としては、新たな要素が加わり未だに慣れない部分もありますが、歴史文化財を市民がより身近にふれあう、より深く知ることができる場が増えることとなり、本当の意味で地域の文化財保護がなされることに大いに期待をかけています。まちの活性化が進み、まちへの愛着が深まり、それらを媒介する文化財等（都市資源）への愛護精神（保護・保存）との循環的相互関係が構築されていくことを心より願っているところです。茅ヶ崎の考古分野は、遺跡見学会や遺跡調査発表展示会などを地道に継続してきたことが広がりを見せ、さまざまな講演会や講座などでも多くの市民が参加される他、国史跡旧相模川橋脚や国指定を目指している下寺尾官衙遺跡群、縄文時代の貝塚群などは地域散策の主要素材として重要な歴史遺産（都市資源）となっており、この分野に対する市民の関心の高さを示しています。

## セピア考古学雑記

神奈川県の考古学の礎を築いてこられた方々から、インタビュー形式でお話を伺い、今につながる神奈川県の考古学の歴史を振り返ります。

今回は、湘南考古学同好会の会長である寺田兼方先生にお話を伺いました。寺田先生は、神奈川県考古学会の前会長で、現在は当会の顧問も務められています。

### 一生い立ち、先生という職業を志すきっかけ

僕は二宮の生まれで、ちょうど子供の頃が戦中で、小学生時代は食糧難で苦しかったです。中学1年の終わりに鵜沼海岸へ一家で引っ越し、鵜沼中学校に転校しました。家は134号の脇で家の前は海、夏には水着のまま家から海への毎日でした。中学時代は勉強よりスポーツマンで、男子でもソフトボール部があって、それをやりました。尾崎實という社会の先生がいて、とても熱心な、なんとか熱血漢の先生でしたので、それに触発されて、教師という職業に興味をもつことになりました。その頃はまだ考古学には出会っていませんでした。

### —考古学との出会いは？

高校に進学してからです。きっかけは石鏃。僕は湘南学園に進んだのだけれども、いろいろな(人の)縁が不思議と、繋がってあるんです。

僕が2年の時に日本史を教えて下さっていた今井恒彦先生が、知り合い(早稲田大学の中沢保氏)に教材として黒曜石の石鏃を借りてきて、見せてくれました。僕ら一人ひとりに。そんなことは初めてであった。石の鏃を、実際に手で触ってみた。強烈なショックを受けました。

それで、こういうものが自分の住んでいる近所にもあるかもしれないと思い、遺跡探訪を始めました。ひとりで自転車をこいで、西は二宮あたりまでいったりしました。それが最初の頃です。

3年生になって、その頃には考古学を大学に進んできちんと勉強したいと思うようになっていたので、相談をしました。担任の友野代三という先生で、本職は平凡社の百科事典の編集をやってる人です。同じ編集の林達夫という人も鵜沼の住人で、子供が林巳奈夫さんといって京大の殷周の青銅器研究の大家でしたが、湘南学園の小学校卒業生です。彼は、子供の頃から考古学に関心を持ち、父親と一緒に市内の古墳等をかなり掘りあさったようです。

話はそれでしたが、この友野先生が樋口先生を紹介してくれました。

当時(國學院大学には)二人先生がいて、ひとりが大場磐雄先生でもうひとりが樋口清之先生でした。それで、僕は入試前に樋口先生に面会したのです。ですから僕は最初から樋口先生について、卒論も樋口先生に提出しました。

でも、考古学では食べていけないと言って、反対されて。父親は、結構賛成したのですけれど、母親が。親戚もずっと反対していました。

### —卒論のテーマに敷石住居を選んだのは？

敷石住居を選んだのは、その性格は何か、ということを知りたいのと同時に、当時の人たちの生活の中に入り込んだ勉強をやりたいと思っていたからです。あの頃は150くらい(事例を)集めました。今は恐らく500くらいあるでしょう。もっとかなあ？

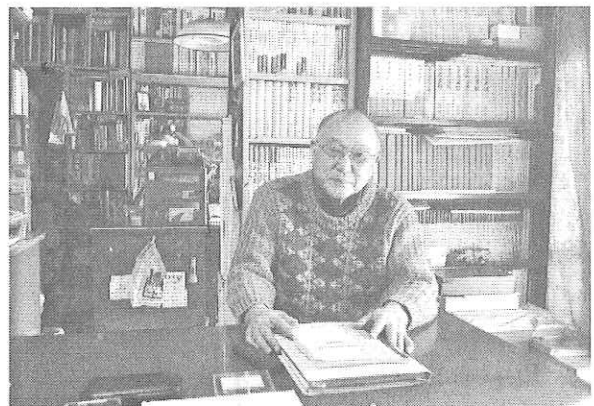
### —教職と考古学研究の両立、地元での活動

僕は教師をやりながら考古学をやろう、両立を目指そうと、最初から考えていたのです。大学院へ進学した年に母校で講師職を紹介されて、中一の地理を二コマ。僕は講師でしたけれども歴史部の補佐をやって、日曜日に子供たちをつれて地名表を作るために歩き回りました。中に、高校から鎌倉学園にいった原信之君というのがいて、熱心な考古学徒でした。

それで、大学院を出た次の(昭和)35年に、藤沢市文化財保護条例が制定されて、専門別の委員を5名任命するということになりました。古文書と地理と美術の先生に、歴史・仏教が当時藤嶺学園の学監であった服部清道先生、それから先史考古学の枠で僕が服部先生から推薦されました。年嵩の先生方ばかりのなか、僕は25歳でした。大変でしたけれども、以来、制定時からずっと、ほぼ半世紀(務めてきました)。数年前、年齢制限があるというので辞任しましたけれども。

### —服部先生との出会いと西富貝塚の発掘

大学3年生の頃から(服部先生の噂)は聞いており、何度も挨拶に行ったり、面会を申し込んだりしました。



2013(H25)年 湘南考古学研究所にて撮影

けれど、毎回忙しいと断られていました。しかし、樋口先生からの招待状を持って訪問したら一転して、快く迎えられました。それから、ずっと交流してきました。

それで、西富貝塚の学術発掘をやるということになって、調査費はPTAが出してくれることになりました。服部先生は藤嶺学園で、僕は湘南学園で講師をやっていたからです。その頃は夜まで調査をやるのは普通でした。遺物や器材は藤嶺学園に置かせてもらっていましたが、これを降ろすのが大変でした。遊行寺の山から、当時は舗装などされていない、今も斜面の急な道を、大八車を押して。ミカン箱には新聞紙で包んで分けた遺物が山盛りでした。もう真っ暗な中を引いて降りる。それが大変でした。(貝層の貝類や動物骨は)直良(信夫)先生に直接持って行って見てもらいました。

#### 一 稲荷台地遺跡群の調査、「藤沢方式」とは？

稲荷台地遺跡群の調査は、飛行場敷地を売却するという話が端緒で、全面踏査の話が持ち上がりました。(藤沢市文化財)保護委員会で検討して、最初は台地上を歩き回って散布地をナンバリングしていきました、A～R地点まで。その中で、特に濃密で広範囲に分布している範囲を試掘するというので、3ヶ所(を決めました)。市場の北と東・南部と。試掘は会社と交渉しました。羽田まで行って直接社長と。それで、原因者負担ですることになったのです。本格的な調査という事になると一人では出来ない。専門の学生などに来てもらわないと。そういうことで、宿泊費の工面と、旅費、それから食費、あとはタバコ銭ですね、1日2箱分の。それで國學院と早稲田と日本大の三大学の学生それぞれ10人くらい(を呼びました)。あとは地元の学生一中高生一が参加して、休みの間だけ調査をやりました。藤沢駅前にあった稲毛屋という旅館の建物を移築して、元市長が大庭に「みどりの家」というユースホステルを開いていました。ここを宿舎にして、マイクロバスで現場まで通いました。関西のほうでは出始めていたけども、日当がつく現場というのは当時はまだなく、それでいつの間にか「藤沢方式」と言うようになりました。当時の現場のことは、「湘南考古ニュース」というガリ版の速報が出されていて、9号まで発行されたかな、そこにいろいろ書いてあります。

#### 一 稲荷台地の調査がひとつの画期というか……

いや、むしろ稲荷台地まではきちんと段階を踏んで、踏査をして、事前の試掘をして、それで、学術的な調査が出来ていました。全部は出来なかったけれど。ただね、その頃から大規模開発が入ってきたので、(調査の手が)追い付かなくなっていました。

#### 一 手弁当の限界、大規模開発の波

西部開発事務局も、二の舞で。局長は理解ある人で、まずは基礎調査の依頼があって、踏査をはじめました。遺跡の重要度によってランク付けをするように言われて、掘らなければわからないのに、3ヶ所一大庭城山と築山、遠藤貝塚一を挙げて、予備調査の結果次第では遺跡を保存の方向で検討する事になりました。それで、城山(大庭城址)は国指定が無理になったので、調査、記録保存することとなり、調査範囲として道路部分のみが指定され、造成後には掘り下げた法面ががっさり失われていました。教育委員会が未対応で、開発の中身を全く把握していない現実があったのです。それで、遠藤貝塚は緑地化の予定であったのが、実際には削られて(しまいました)。保存のための調査だったのに。

大規模開発に対応するには、行政が事業として取り組まなければ守れない。港北ニュータウンのように、ちゃんと事業として対応しないと。全部こちら(個人)でやろうというのには限界があります。

#### 一 影響を受けた人あるいは印象に残っている遺跡は？

一番印象に残っている遺跡はやはり西富貝塚です。貝層の調査をした市内で最初の調査です。敷石(住居)もまさか出るとは思っていなかったです。炉の中が真っ赤に焼けており、焼土がぎっしりで。あれはやはり、普通の住居ではないと、そう思いました。

僕は、大学の終わりくらいに大場先生が伊豆の伊東市史の編纂顧問になって、亡くなられた小出(義治)先生が編纂委員として同行され、学生何人かも連れていかれて、2年くらい手伝ったのかな？それで、静岡県文化財専門員で長田実という、國學院の大先輩の先生が、僕の敷石住居の卒論をみて、面白いて。気に入られてしまって、呼ばれてね、伊豆の見高段間遺跡という、これも敷石なんだけどそこも掘って。それとまだ報告書を出してない上の坊遺跡は、早期の押型

文の大量に出ている遺跡。これも長田先生に頼まれて掘って。これから(報告書を)完成させるんだけどね。

あとは小出先生には重宝がられて方々連れて行かれて手伝いました。新潟も行ったし福井の方へも行った。—**地域に学ぶ『湘南考古学同好会』、考古学とは？**

歴史というのは、まず自分の住んでいる、生きている場所の、郷土の歴史を組み立てる事が必要で、僕は藤沢の地元に帰ってきて、考古学を勉強するのに、まず必要なのは何であったかという、まず遺跡のある場所をリストアップしなくてはならない、要するに地名表をつくるのがまず基礎作業、考古学の学問の出発点はそこにあるんじゃないか。僕は同好会でみんなを引っ張っていくのに、考古学のセオリー通りにね、まず、それをみんなに経験してほしいと。ただ拾ってくるのではなくて、拾ってきたらこれは何だろうという、そういう勉強もしなくては。それで、やっぱり面白さがわかってくると思います。

—**寒川町の踏査成果が包蔵地図になっていますね。**

なぜ、寒川を選んだかという、当時この辺の市町でしっかりした地名表がなくて、歩いて作れば一定の成果をあげられる、しかも、遺跡が必ず見つかる場所だというので決めました。それで寒川を全部歩いて、最初に会報に載せたのですが、これをぜひ町で発行したい、という話があって。

畦道を歩いているときに怒鳴られて追い返されたこともありました。昔はなかったです、畑の中をがぼがぼ歩いて。今は絶対ダメ。最近は何んだか踏査が怖くなっています。怒鳴られたりなんかして。土器を拾うとか、石器を拾うとか、もう(最近の人は)ないですね。

その後、湘南砂丘の踏査も始めました。一応藤沢分は全部歩きました。他はお隣の茅ヶ崎は、もうきちんとやってきていますからね。砂丘踏査は、同好会の年間行事みたいに集合場所を決めて案内書を出して、集まった人だけで歩きました。

—**今後、掘りたい遺跡や気になる場所は？**

僕がいま一番掘りたいのは、砂丘の深いところとか、もうひとつ掘りたいのは谷戸とか谷底。今まで数はたくさん掘ってきましたが、そういうところの事例が藤沢では今までありません。田んぼだから掘らなくて良いのではなくて、その下に必ず(遺構が)あるはずですから、厚い堆積層の下に。

—**そのほか、何かこれだけは、ということとは？**

後は、あの問題、博物館の問題ですね。

僕は一年間の日本史の授業が終わると、生徒たちにこういう話をします。一人間が持っている時には、過去と現在と未来と三つがあります。現在というのは一瞬にして過去になって、人間が意識するときには過去になっています。現在という時を意識できると考えて、今、自分がどの方向に向かって進んでいくべきなのかは、今自分の立っている場所、それを正しく理解すれば、進む方向は自ずと決まる、と。今を理解するためには、自分が背負っている過去を知らないとは理解できません。そう考えると、やはり過去というのは今生きていく人にとって、大事な存在である、と。そういう意味で歴史を勉強するということは、将来を生きていくために必要な知識といえます。歴史の上に、我々の生活というのは展開しているのではないかと思います。全く何も無いところに人々の生活があるじゃなくて、郷土の長い伝統、歴史の上に、現代の人たちの生活というのは繰り広げられているのでしょう。

そういう意味で、藤沢というまちをぱっと考えたときに、どういう郷土なのかという、やはりひとつは遊行寺というお寺の存在と、近世の宿場町と機能と、僕はそのふたつが、藤沢の郷土の基盤になる、町の性格だと思います。それを大事にして、その中から何か生まれてこないか。博物館(建設)というか、郷土の歴史を描いて、それをみていくと、自ずと将来が、未来が見据えられるような方向を描けば良いのだと思います。

—**最後に今後の考古学、埋蔵文化財に関して一言。**

藤沢では、これからは北半の開発が心配になります。また、いずれ大規模開発ではないけれど、かなり次々と開発されていくことになると思います。それを、ただ民間会社が請け負って調査するだけではなくて、開発に役所が関わっていく必要があると思います。やはり役所がきちんと対応しないと良くないと思います。(さもなければ、)また、(かつてと)同じ事になってしまいます。

—**どうもありがとうございました。**



## 【文中に登場した主な人物と遺跡】 ※掲載順敬称略

- 友野代三(ともの だいぞう)  
中央公論社、平凡社で編集長を歴任。日本近代文学専門。湘南学園高等部開設時に講師として在籍
- 林達夫(はやし たつお)  
平凡社で編集責任者として『世界大百科事典』を編集。文学評論、思想学等で活躍。「鶴沼夏期自由大学」開設などで地域の文化振興に尽力。
- 林巳奈夫(はやし みなお)  
京都大学名誉教授。同人文科学研究所において殷周時代の青銅器、図像学等の研究を進めた。林達夫氏の子息で、藤沢市鶴沼に生まれ育つ。
- 服部清道(はっとり せいどう)  
文献史学、仏教考古学者。板碑研究に邁進。藤嶽学園教員。条例制定時から30年間藤沢市文化財保護委員長
- 樋口清之(ひぐち きよゆき)  
國學院大学名誉教授。日本史・考古学・文化人類学において調査研究を行い、一般向けにも幅広く著書を残す。
- 大場磐雄(おおば いわお)  
神奈川県立第二横浜中学校、内務省勤務の後、國學院大学教授。神道考古学研究の基礎と発展に貢献。諸磯式土器、弥生時代墓制等の研究。
- 直良信夫(なおらの ぶお)

動物考古学者。長く独学で考古学を学び、在野研究者として日本古代史の解明に努める。晩年、古生物学を修め早稲田大学教授となる。「明石原人」発見者(※のちに中世人骨と同定される)。

- 小出義治(こいで よしはる)  
神奈川歯科大学教授。専門は古墳古代。代表的な著作に『土師器と祭祀』
- 西宮貝塚  
藤沢市 No.46 遺跡。遊行寺境内裏の緩斜面に広がる縄文時代後期を中心とする集落跡、貝塚。藤沢市指定史跡。
- 稲荷台遺跡群  
藤沢市所在。引地川左岸の「稲荷台」台地上に位置する弥生時代中期から古墳時代の集落跡が密に展開する。先土器時代、中世、近世の溝状遺構、現代の戦争関連遺構等も分布する複合遺跡。
- 西部都市開発事業区域内遺跡群  
隣市茅ヶ崎市に隣接する藤沢市西部一帯の土地区画整理事業に伴う分布調査により発見登録された遺跡群の総称。大庭城址、遠藤貝塚(調査範囲は現在の茅ヶ崎市域)など。
- 見高段間遺跡  
静岡県河津市所在の縄文時代遺跡
- 上の坊遺跡  
静岡県伊東市所在の縄文時代遺跡

## 平成 24 年度神奈川の遺跡展 『勝坂縄文展』 見学会記

服部 みはる

しばらく「遺跡の展示を行う」という立場から離れているが、遺跡展を企画するときどんなプロセスで展示を組み立てていくか、思いおこしていた。主題とする時代や遺跡が決まると、小テーマを考え、思いつく限り書き出す。書き出してみたテーマを具体的な展示にするとどうか…展示のイメージが膨らむものもあれば、予算や施設上の問題で物理的にダメか…、というテーマもある。どんな展開にするか、いくつかのテーマを組み合わせさせてストーリー展開を考えていく。

この勝坂縄文展は、展示を見る前は岡本太郎も登場するし、いったいどんな展開をしていくのだろうと思っていた。出展数も約 150 点と決して多くはないし…と。

縄文の展示は土器一点が大きいので出展数は少なくなる。展示を企画するときには出展数も気になって、もう少しこのケースを詰めて展示物を増やすか?と悩んでしまう。何しろ土器だって一つずつ顔つきが違うし、せっかくの機会だからなるべくたくさんみてもらいたい。

ところが今回、勝坂縄文展の展示室に足を踏み入ると、そんな迷いは少しも感じられなかった。選んだ一つ一つの土器にそれぞれエピソードを語

らせる。そればかりでなく、見学者の考えまでもボードに書き出させ、その発想までも展示に取り入れてしまう勢いだ。照明も通常の考古の展示とはかなり違う雰囲気、遺物を鑑賞する仕掛けになっている。気づけば、展示を企画担当した千葉毅さんの解説に引き込まれ、考古の展示を超えた一つの作品として見いていた。

いつものかながわの遺跡展とはずいぶん趣が異なり、いい意味で「かながわの遺跡」を飛び越えた展示であった。

勝坂縄文展は 2 月 16 日から 3 月 20 日まで巡回展として相模原市立博物館で行われる。展示会場に合わせてどんなアレンジがされるのか、私はもう一度見に行こうと思う。

(見学会開催:平成 25 年 1 月 13 日

於 神奈川県立歴史博物館 参加者 30 名)



平成 24 年度第 2 回見学会:参加者の記念撮影 展示室入口にて

# 大地の一頁

## 横浜の台地に眠る大集落 ～三殿台遺跡～

(公財) 横浜市ふるさと歴史財団  
横浜市三殿台考古館 橋口 豊

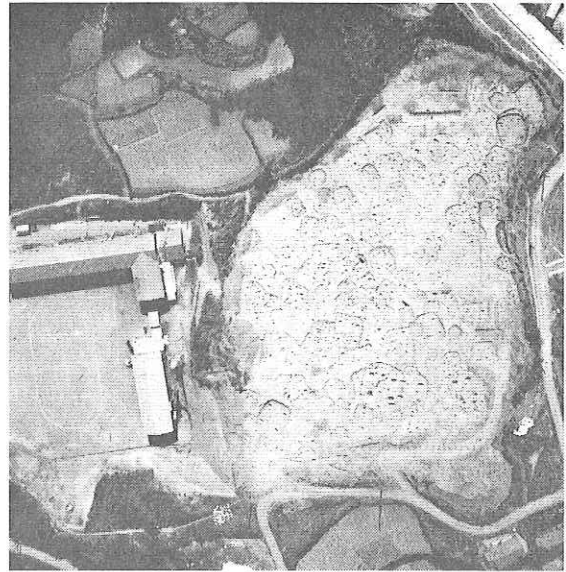
三殿台遺跡は、横浜市の南部、磯子区岡村の標高約 55 m の台地上に所在する縄文・弥生・古墳時代の集落遺跡です。

三殿台遺跡発見の経緯は、明治期にまでさかのぼります。明治 31 (1898) 年の 12 月、医者いしやの藤田清玠は往診の道すがら、貝塚を発見し土器片や骨、歯牙製垂飾などを採集します。藤田は東京帝国大学人類学教室へ連絡し、翌明治 32 年 3 月に、同教室の助手を務めていた鳥居龍蔵を遺跡に案内し、貝塚であることを確認しました。この貝塚は同年 5 月発行の『東京人類学雑誌』158 号で、「岡村貝塚」として紹介されました。

遺跡発見当初は保存状態の良い貝塚として知られ、また東京から近いこともあり、坂詰仲男や石野瑛あきらなど多くの日本考古学界の先学が訪れて発掘調査・採集を行いました。

昭和 29 (1954) 年に三殿台遺跡の東側隣接地に滝頭小学校岡村分校が開校します。昭和 30 年代に入ると横浜市の人口は急激に増加し、岡村分校も校舎の増改築と新校舎の建設を行い、さらには遺跡をとどめる台地の一部を切り下げて校舎を広げる計画も持ち上がります。そこで、和島誠一を中心に 2 度の予備調査を経て、昭和 36 (1961) 年に約 10,000㎡におよぶ台地の全面発掘が行われました。

その結果、縄文・弥生・古墳時代の住居跡約 270 軒とともに多くの遺物が発見され、各時代の集落の様相が明らかになりました。特に弥生時代中期後半から後期にかけての住居跡が多く、地域の拠点であったと考えられています。発掘調査の段階から既に遺跡保存の機運が高まり、その甲斐あって昭和 41 年に国指定史跡となり、翌昭和 42 年に、



発掘された三殿台遺跡 (昭和 36 年撮影)

三殿台遺跡から出土した遺物を中心に公開展示を行う展示室、遺物を収納する収蔵庫、弥生時代後期から終末にかけての住居跡 6 棟を発掘調査当時のまま見学することを可能にした住居跡保護棟、3 つの時代の復元住居などを整備した三殿台考古館が開館しました。

館では現在、収蔵庫内の資料をより多く提示し、横浜の台地に眠る大集落への理解をより深めることができるよう、再整理を行っています。また市民協働事業の一環として、市民参加の遺物整理ボランティア、遺跡ガイドボランティア活動を展開するとともに、考古学に関連する各種体験教室を開催しています。

### 【引用・参考文献】

横浜市歴史博物館 1998 『横浜発掘物語 一目で見る発掘の歴史一』  
横浜市歴史博物館 2011 『大昔のムラを掘る—三殿台遺跡発掘 50 年—』

### 【横浜市三殿台考古館】

住所 横浜市磯子区岡村 4-11-22

TEL 045-761-4571

FAX 045-761-4603

HP <http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/shisetsu/sandd/>

その他、詳細はホームページをご覧ください。

● 考古学講座のお知らせ

今回のテーマは、「文明開化の考古学」です。考古学で扱う物質文化資料に加え、幕末開港期の浮世絵や文献史料等から多角的に近代を読み解きます。ぜひ、ふるってご参加ください。

テーマ：「文明開化の考古学」

開催日：2013(H25)年3月2日(土)

時間：9:50～16:40

会場：横浜市歴史博物館 講堂

アクセス：横浜市営地下鉄線「センター北駅」より徒歩5分

会費：無料 ※資料代実費

主催：神奈川県考古学会

問合せ：080-5061-5265(天野)

※会場となる博物館へのお問い合わせはご遠慮ください。

内容：幕末横浜開港期の歴史資料等から近代の様相を探る

講師：※演題はすべて仮題。

櫻井 準也 氏 (尚美学園大学)

『文明開化の考古学』

天野 賢一 氏 (かながわ考古学財団)

『発掘された外国人居留地』

福田 敏一 氏 (東京都埋蔵文化財センター)

『旧新橋駅の発掘調査について』

桑山 童奈 氏 (神奈川県立歴史博物館)

『浮世絵に見る文明開化と横浜』

宮田 眞 氏 (株式会社 博通)

『東海道藤沢宿の調査について』

青木 祐介 氏 (横浜都市発展記念館)

『横浜生まれのフランス瓦』

※ なお、今回の講座では、新たな試みといたしまして、講座終了後に内容をまとめた冊子を作成する予定です。当日会場では、講座冊子に替わり、レジメを用意しております。実費にてお求めください。

● 神奈川県内の考古学関連の主な催し (2013年3月開催分)

	名称	主催	開催期間	時間	場所
展示会	平成24年度かながわの遺跡展 「勝坂縄文展」(相模原会場)	相模原市立博物館	2/16～3/20 ※月休	9時30分～17時	相模原市立博物館
	「岡田遺跡展～岡田遺跡出土の釣手土器 町指定重要文化財指定記念～」	寒川町生涯学習課	11/24～3/30 ※月木日祝休	9時～16時	寒川町文化財学習センター
	昔のくらし今のくらし2013	川崎市市民ミュージアム	1/26～3/31	9時30分～17時	川崎市市民ミュージアム
	平成24年度あつぎの遺跡展 「発掘された厚木」	厚木市文化財保護課	3/9～3/24	9時～17時	厚木市郷土資料館

講演	〈かながわの遺跡展(勝坂縄文展)関連事業〉「勝坂遺跡と勝坂式土器」 講師:千葉毅氏	相模原市文化財保護課	3/10	10時～12時	勝坂遺跡公園管理棟
----	--	------------	------	---------	-----------

発表会	平成24年度伊勢原遺跡調査報告会	伊勢原市文化財課	3/16	13時～17時	伊勢原市立図書館
	相模原市埋蔵文化財調査速報発表会	相模原市文化財保護課	3/24	13時～16時	旧石器ハテナ館
	厚木市発掘調査成果発表会	厚木市文化財保護課	3/24	14時～17時	厚木北公民館

その他	体験教室「弓矢作り」	相模原市文化財保護課	3/17	14時～16時	旧石器ハテナ館
	小田原市遺跡見学会(久野周辺の遺跡めぐり)	小田原市文化財課	3/24 ※申込3/15～	8時30分～12時	小田原市久野周辺

● 総会のご案内

平成25年度の神奈川県考古学会総会は下記の日程で予定しています。総会後には例年通り、トピックスも開催予定です。議事等詳細がきまりましたら、正式にご案内いたします。会員の皆様の参加をお待ちしております。

○日時:平成25年5月11日(土)13:00～17:00

○場所:神奈川県埋蔵文化財センター3階研修室

● 新規役員の募集!

今年度末をもって、数人の役員が任期満了となります。これに伴い、上記総会において、役員の変更を行います。運営に携わってみたい、いろいろ企画して事業を実施してみたい、小さいことからでも協力したいという会員の皆様、この機に役員になってみてはいかがでしょうか?やる気のある方は右記メールアドレスまたはお近くの役員までご声がけください。

● 会誌等に残部あり!

過去の刊行物に残部がございます。会員のかたでご希望の方は右記Eメール宛にご連絡ください。

● 編集後記

今回は、巻頭言に富永さんから茅ヶ崎市のまると博物館の取り組みについてご執筆いただきました。近年、各地で実践されつつある、歴史や文化を地域資源としてまちづくりに活かしていこうという試みの、先見的かつ魅力的なモデルのひとつではないでしょうか。

「セピア考古学雑記」も今号で3回目を迎えました。インタビューでは興味深いお話をたくさん伺うのですが、紙幅の都合で大幅にカットせねばならないのが残念です。会員の皆様のなかで、「この方のお話を載せてほしい!」などというご意見がございましたら、どしどしお寄せください!

考古かながわ 第49号	
発行	神奈川県考古学会
発行日	2013年2月28日
編集	野口浩史・高橋和・桑原安須美(連絡誌担当)
印刷	(有)湘南グッド
発行者	神奈川県考古学会 会長 岡本孝之
郵便振替	00240-9-71208
E-mail	soumu@koukokanagawa.net
URL	http://www.koukokanagawa.net